

戦中の思い出

●宮前四丁目

牧野 智恵

(昭和三年生まれ)

昭和二〇年三月一〇日、米軍の焼夷弾攻撃により深川は焼土と化し、両親、兄弟六人を失い、一人ぼっちになりました。当時、私はトレース工として働き、夕方からは、夜学に行っていました。

九日、学校から帰って間もなくの空襲です。隣組の人たちと力を合わせて作った大きな防空壕に飛びこみ、しばらく様子をみていましたが、あちこちに火の手があたり逃げることになりました。母と弟三人を連れ、人の群れの中に……。学校裏の四ツ角で、ライトに照らされたB29が低空飛行で焼夷弾をばらばらと落としました。思わず地べたに、俯せうつぶせになつたその時が、別れになってしまいました。人の流れのままに逃げ、橋の上で立往生、火の付いた布団等がとんで来ます。這いながら欄干で下を見ると、大きな舟がありました。誰かが燃えあがる私の防空頭布をもぎ取ってつき落してくれました。どなたかわかりませんが命の恩人です。橋の上からは「水をくれ」と叫ぶ声、川の中程では真っ赤に燃えた舟が強風にあおられて、勢いよく流れて行きます。まるでこの世の地獄

でした。

夜が明けて陸にあがると、鉄筋の建物を残して見渡す限りの焼野原になっていました。髪は櫛が通らない程かたまつて、目は充血し、オーバーは焼けてポロポロ、肌着まで焦げて、ひどい恰好をして、我が家の跡地に行ってみました。何もかも「無」でした。焼夷弾が五〇センチおき位に地面に突きささっており、防火水槽の中に、黒焦げになって死んでいる人もいました。一時避難所では、火傷の人でいっぱいでした。やっと戴いた乾パンを取られてがっかりしました。当時、堀之内に住んでいた叔母が来てくれ、一緒に暮らす事になりました。

数日後からは、肉親探しに東京駅からテクテク歩いて深川へ通いました。丸焼けの小学校の講堂には、水死人が隙間なく並べられており、その間を探して歩きましたが、母も弟もみつかりませんでした。防空頭巾にモンペ姿で眠っているように、今にも起き上って来そうに思われました。当時は精神状態がおかしくなっていますから、何の感情もわきまませんで

した。恐ろしいことです。家族のわかった人は、公園などで茶毘に付したのです。我が家のそばの壕では軍隊がトラックで来て、トタン板に死体を乗せ、荷台に積み上げられています。私は思わず立ちつくしてしまい、憲兵に叱られました。後日、聞いた話ですが、父と兄は隣組長をしていた関係上、最後まで残り、壕に入って蒸焼き状態で亡くなったようです。放心状態で涙も出なかった私でしたが、日が経つにつれ、悲しみがこみあげ、"いっそ死んでしまえばよかった"と暗い日記を書いては、先生に励まされました。

堀之内に行つてからも、空襲になると救急袋に靈簿を入れて壕に入る生活でしたが、夜の空襲が怖くて我慢ができず、叔母に無理を言つては奥多摩の知り合いの家に泊めて頂きました。衣類も食糧もなく、買い出しに行つても売ってくれず、水っぱい薩摩芋や一本の大根を小さく切つたその一切れが配給という、ひどい食糧事情でした。燃料も尽きて妙法寺裏の杉の木の皮を剥いだこともありです。空腹状態が続くと思考力も意欲もなく、ただ時を過す。若かったのでこの体験はともつらく思いました。夜学の帰りは高円寺から堀之内まで歩くのですが、早く家に帰りたくて墓地の中を近道しました。あの道は本当に遠かつたと今でも思います。

昭和二一年春、長男の兄が兵隊から帰つて来ました。焼跡のバラックに住んでいた隣のおばさんから、私が生きていることを聞いた時は、本当に嬉しかったそうです。戦後は、何年も家族の死が信じられず、いつか、ひよっこり会えるよう

な気がしてよく夢をみました。四六年経過した今も記憶のうすれる事はありません。実家の墓には、お骨はなく、都の慰靈堂に納められている事を信じて、毎年三月一〇日には、お参りをし、ついでに献血をして、門前仲町まで、あの日を思い心で合掌しながら歩く事が十数年続いております。元気な間は続けたいと思いますし、五〇回忌は盛大にご回向したいと考えております。

今日の繁栄の陰には数知れない多くの犠牲者のあることを肝に銘じて、二度と過ちを繰り返さないよう、そして世界中が平和になることを心から祈っております。

戦災体験記

●高円寺南二丁目

増井 勢意

(明治四五年生まれ)

杉並区高円寺二丁目に住んで六十余年、日中戦争から太平洋戦争と、日本で最も悲惨な体験をして今日に至りました。

私の実家は燃料商でした。したがって燃焼物の薪炭が大量に積み込まれて、統制会社の配給所になっていました。その倉庫の隣に私たち夫婦の家があり、主人は石炭の統制会社に勤めておりました。昭和一二年九月、兄が召集されて中国大陸へ。翌年八月、主人が応召となり北支に出征して男手を失なりました。幸い主人の勤め先から生活費が支給されましたので助かりました。

戦争が次第に拡大してゆくのをみていると、心細さが身に染みます。食糧、日用品等物資が配給制度になり、隣組の防火訓練が強制的に実行されるようになり、トゲトゲしい時代になってきました。当時私は二児の母で長男は八歳で田舎へ疎開し、二歳の長女と共に家を守っていました。

昭和二〇年五月二五日午後九時ごろ。遂に最悪の状態となった。突然空襲警報が鳴り響いた。急いで子供を背負い、防空壕に入った。やがて敵機の爆音がして爆弾の破裂音がし

た。耳を塞いで神や仏を念じ乍ら、じっと我慢しながら飛行機の去るのを待った。やがて静かになったので壕を出ようとしたりとたん、顔に何かがさわったような気がしたが気にもとめず外に出た。瞬間血が逆流しそうになった。新築して六年目の我が家が燃えている。附近の家も旺さかんに燃えていてこの世の地獄の形相であった。背中の子供は火のついたように泣く。消火どころか逃げるのが精一杯。子供の着替用をリュックの中に入れて置いたのを思い出して、驚おどろき顔に持って杉並第三小学校に待避しようと歩いたが、その小学校も炎の中。逃げ場のないまま気をとりなおして第十小学校（今のセシオン杉並）に向かつて歩いて行く途中広い草原に出た。防空壕がいくつもあったので一先ず壕に入って一休みする。夜の一時ごろかと思えます。至る所火炎で昼のように明るく無気味でした。空を見ると敵機がたくさん飛んでいて焼夷弾を落します。それが途中で数個に分かれ火の玉となって落ちてくるのが見えます。それらが自分のいる近くに落ち始めたので、子供を抱え目をとじて「阿無観音菩薩、阿無阿弥陀仏」と唱

えながら御仏の力を頼りに助けを求めていました。その内に敵機も去り静かになったので、やれやれと安心したのかそのまま眠ってしまった。

子供の泣く声で目醒めた。夜が明けて空も晴れ渡り爽やかな朝であった。五月二六日午前五時ごろだろうか。子供に乳を与えようと壕を出たら近くにお寺があったので、縁側を借用して背中の子供を膝に移したら急に泣きだした。一晚乳を与えずにいたのでお腹がすいているはずなのに、不思議なことを思いました。その時寺の奥様らしき婦人が来て私の顔を見るなり驚いた様子で「あなたの顔はひどく怪我をしています。早く手当をした方がよい」と言われて、初めて自分を取り戻し顔にさわって驚いた。額が切れて血潮が乾いてこびり着いていた。前歯が二本折れ頬が腫れ上って顔面がヒリヒリ痛んでいる。髪も乱れて他人が見たらこの世の者とも思わぬ程だったろう。我が子すら母の顔とは思わず泣き続けたのだった。幸い近所の知り合いに出合い、蚕糸試験場に兵隊さんがいるから軍医さんもいるかも知れないからと、連れられて額を三針縫ってもらい、顔も消毒してくれました。やっと生き返った心持ちで我が家の方に歩き出したら膝の上あたりが痛み出し、足をひきずりながら青梅街道に出た。町会からのおむすびを戴いてさて今夜の寝床はどこにするか、考えながら焼跡の我が家の方に向かった。そこに疎開した無人の防空壕があったので、今夜の寝ぐらに定めて昼間のうちに準備をしておいた。

私の家の隣は木炭の倉庫である事は前記の通りで、火災のため木炭の山は火の山となって、昼夜を問わず燃え続けて、消防車で放水して一時は静まるが、消防署員が帰った後再燃して、夜間は敵機の目標となると巡回の監視員から厳しく叱られます。中には「今日中に消火しないとぶつ殺すぞ」とすごい怒声を残して行く人がいました。荒んだ世の中になりました。

主人がいてくれたらと愚痴がでます。もうこれ以上ここにはいられないと決心して田舎に行くことにしました。中野駅に乗車券を求めに行ったが、長い行列で一日目は駄目。二日三日とはずれ、五日後にやっと手にして汽車に乗った。座席どころか通路に座り目をとじて、これからの運命はどうなるか心配はつきません。平素疎遠だった主人の実家にやっとの思いで辿り着きました。遠慮勝な私たち親子を義母がよく面倒を見てくれました。長男も元気で学校に通っていました。何よりも、食事が出来て、畳の上で安眠出来ることが幸せでした。

そして八月一五日の終戦を迎え、主人も無事に復員して、再び焼跡に家を建て笑いが戻り現在に至りました。

東京大空襲を思う

● 荻窪四丁目

宮坂 正直

(大正三年生まれ)

私は、北支及び満州と二度の召集を経て、昭和一八年六月郷里で結婚し、勤務地である東京に向かい、従前の荻窪の家に二人で落ち着いたが、物資はとみに欠乏しはじめて、配給制度となった。大根一本の四分の一を求めものにも長い行列を作って時間を空費した。幸い、隣地に家を一軒分建てる余地があつて植物の庭にしていたが、これを畑に切り替え各種の野菜を作り、主食以外は随分助かつたものである。

私が満州にいた昭和一七年四月一八日に、既に東京は初空襲を受けていたという。制空権もなくなり、昭和一八年ごろから疎開が始まつた。一方、荻窪駅と列車交通を守るため、駅付近の家屋は強制的に柱を切つて破壊された。私も昭和一九年初めごろに、家財と身重の妻を妻の実家に疎開させた。四月五日に長男が郷里で無事誕生し、しばらくして妻は子供を連れて上京して来た。しかし、空襲警報が出る回数が多くなつて来たので、再疎開するように言つたが聞かなかつた。私は東京駅脇の鉄道省本省に勤務しているので、昼は女、子供だけになり、また隣組の防空壕は遠いので心配になり、庭

に防空壕を作ることにして掘つたけれど、地下水が高い所なのでゴム長靴でないと駄目だった。仕方ないので、木材で高くしてその周囲を土でベトン状にし、警報が鳴つたら上と横に畳をあてることとした。

ある日、私が家にいたので多分日曜日であつたのだろう。空襲警報が鳴ると同時に妻はモンペ姿で、火事場の馬鹿力というが、どこにそんな力があるのだろうかと思つて直ちに重い畳を上げて壕に積み上げ、子供にずきんをかぶせて背負い、ゴム長靴をはき待機していた。もちろん私も手伝つたけれど、こんなものでは全然安心することはできなかった。

私は隣組の方も見なければならぬし、郷里からは早く疎開させると叱つてくるし、生活も楽ではないし、いつそひとり身の方が気が楽であるので、遅まきながら妻子を再疎開させることとした。

昭和一九年七月にはサイパン島が陥落し、空襲が激しくなつてきた。ある日、近くの荻窪高校の付近を低空で機銃掃射していくのを見た。一月には青く晴れた上空一万五〇〇

○メートル以上のところを、白魚の群れが泳ぐように編隊を組んだB 29が飛んでいるのを見上げて、美しいなあと思う反面、どうにもならない悔しさがこみ上げてきた。

モロトフの花籠とかいっていた焼夷弾で、都内の家屋を焼き払い始めた。私の課の先輩K氏は不幸にも大久保で焼け出され、また引越先で二度やられて無一文になり、私の家へ来ることになった。次に池袋でやられた大蔵省に勤める北支時代の戦友G君も、そして私と同じ課の友人J君が横浜で遠いため勤務にさしつかえるので私宅へ来て、夜は男四人の世帯、昼は勤めに出るので無人という状態が長く続いた。

西荻窪の中島飛行機製作所をねらった爆弾が、ゴーツという空気を切る大きな音を立て、荻窪に流れて相当落ちた。私の家は運よく落ちた地点の三角形の真中となり、ガラス一枚割れずに済んだが、戦地にいた時よりもこわかったように感じた。また、その爆弾で埋まった人を救出するために動員され、一生懸命掘ったこともあった。

そして昭和二〇年三月一〇日は、忘れることのできない憎むべきあの東京大空襲となり、荻窪の自宅から眺めた東京の中心地は、炎が高く広く真赤に夜空を焦がしていた。正に焦熱地獄をこの眼で見た。東京は全滅するのかと覚悟していたが、阿佐ヶ谷付近まで壁が真赤に見えただけで、荻窪は家屋があまりなかったので、二、三軒ずつあちこちで焼けた程度だと思った。したがってその後の荻窪の家々の表札は、親戚縁者を頼って来た人たちのもので、一軒に三、四所帯位が普

通であった。

そして八月に広島、長崎に原子爆弾を投下されて残虐なる殺りくを行われ、遂に同月一五日終戦となった。世界中が平和でなければならぬことをつくづく思った次第である。



戦時下での日常生活、学校生活を 顧みて（戦争末期のあのころ、あの日々）

●高井戸西三丁目

宮崎 浩

（昭和一一年生まれ）

・はじめに

あの戦争の時代と言うと、随分昔のことになってしまったが、事によっては大変記憶が鮮明で、その時の情景が臉に蘇ってくるものもある。そこでここでは、そうした事柄を取り上げ、記述して見ることにしよう。

・『B29来襲と迎撃戦の記録』

B29による東京初空襲は、昭和一九年一月二四日とされている。当時私は杉並区西田町にある西田国民学校（現西田小学校）の二年生であった。戦局は緊迫の度を増し、とりわけサイパン陥落後はB29による東京爆撃が必至と見られていた。学校でも防空頭巾を被つての避難訓練が度々行われた。教室の中で防空頭巾を被つて机の下に丸くなって伏せたりしたこともあるが、直撃弾にどれだけ効果があったかどうかは今考えるといささか疑問である。

校庭には屋根を土でかためた小山のような防空壕があった。普段この山はアツ島と呼ばれ、私たちの恰好の遊び場でもあった。ちなみにアツ島は昭和一八年五月、玉砕を遂

げた。

昭和一九年の八月には、都市部の国民学校の三年生以上を対象としたあの学童集団疎開が始まった。私たちはこの時点では残留し、翌年、疎開に出発することになる。

さて、一月に話を戻すと、二四日以降B29の来襲が頻繁となり、空襲警報も度々鳴るようになった。

私の住んでいる高井戸地区では、浴風園の本館の屋上に取り付けられたサイレンが鳴り、B29の東京西部地区来襲を告げたものである。あのサイレンの音は今でも耳に残っている。高高度を飛ぶB29は地上から見ると大変小さく、キラキラ輝いて見え、巨大な機体という感じはしなかった。真っ白い飛行機雲を引いて西から東に飛ぶあの十数機の編隊の姿は、鮮明に思い出すことが出来る。

昭和一九年二月二七日、もう暮れも押し詰まったころであったが、この日も昼ごろにB29の来襲があった。この時の様子を私自身の当時の日記によってそのままご紹介すると、次のとおりである。

『二月二十七日(水) 晴』

今日 おひるのごはんをたべている時、けいかいになりました。ぼくはいそいでごはんをたべました。

少したつと空しゅうになって、つきがとんで来ました。家の上で空中戦をして、せんたうきがつきにたいあたりをしてB29がけむりをはいて落ちて行きました。

「たいあたりをしたせんたうきは家のすぐそばに落ちました。」この時の情景は直接私が目撃したので、非常に鮮明に覚えている。この出来ごとは杉並上空、しかも自家のまさに上空で行われた迎撃戦であった。この日の迎撃戦の模様は多くの都民に目撃されたようであり、関連の資料、文献にもこの日のことが記されている(例えば、入江相政著・「入江相政日記」の昭和一九年二月二十七日の項、柳田邦男著・「零戦燃ゆ」渾身編、p143-144の記述参照)。

この日の迎撃戦では、日本の陸軍戦闘機数機が西から侵入してきたB29を迎撃し、二機が壮烈な体当たりを遂げた。体当たりをした戦闘機一機は、上高井戸五丁目(現高井戸西三丁目)の我が家の数軒先の家の裏口の垣根近くに落ちた。私も落ちてから見にいったが、かなり小型の機体であった(機種は明らかでないが当時の新鋭機であった陸軍の三式戦闘機、飛燕であったかも知れない)。

しかし、この時は空を見ていて体当たりによる衝撃音が聞こえたと思ったら、体当たり機の機体がばらばらになり、我が家の真上に落ちてくるように見えた。そこで、あわてて家

族と一緒に庭に掘ってある防空壕に飛び込んだが、もし防空壕が直撃されたら我々もつぶされてしまったかも知れない。

この時の攻撃で体当たりされたB29は白煙を引きながら落下して行った。

その後、昭和二〇年に入るとB29来襲の回数が増え、警戒警報が度々鳴るようになった。

夜間の空襲も多くなったが、灯火管制が指示されていたので必ず電気を消し、警戒警報が解除になるまで家の中や防空壕でじっとしていたものである。高井戸地区は当時大きな軍事施設は無かったので、大規模な爆撃は受けなかったが、それでも焼夷弾攻撃は受け、何軒かの家は全焼してしまった。浴風園の建物や今のNHKのグラウンドの所に高射砲陣地があったからかも知れない。

B29が来襲したある日、母が私たち子供を呼び寄せ、「死ぬ時は一緒に死ぬるかたまっていよう」と言って、体を寄せ合っていたことをよく覚えている。昭和二〇年三月ごろであったろうか。

我が家は垣根に焼夷弾が落ちたが、幸い垣根が燃えただけにとどまった。昭和二〇年、学童疎開に出発するまでの時期は空襲が頻繁にあたりして、誠に落ち着かない時期でもあった。学校へはいつも防空頭巾を被って登校したと記憶している。また、このころ校舎は半ば兵舎化し、陸軍の兵隊さんが駐留していた。

そして昭和二〇年四月に新三年生になった我々は、前年疎

開した六年生が卒業で帰京したのと入れ替わりに、信州へ向け集団疎開へ出発することとなった。出発は五月三日であった。

東京空襲というと、あの三月一〇日の下町の大空襲が言われるが、当杉並区も荻窪に中島飛行機荻窪製作所（現日産工場）があったこともあって、かなりB―29による被害を受けたのである。